

■教育行政のポイント

PISA から見た“日本の教育”

菱村 幸彦

我が国では、学校教育に対する批判が絶えない。橋下徹大阪市長による「バカ文科省」「クソ教育委員会」という雑言に代表される学校バッシングなどは、その最たるものであろう。

日本の教育の卓越性を評価

ところが、以前から外国では、日本の学校教育の卓越性を称賛する声が少ない。少し古い例では、アメリカの専門家が日本の教育を調査した『日米教育協力研究報告書』（1987年）がある。報告書は、日本の教育の卓越性を指摘し、「日本の教育から学ぶべきもの」として、① やる気を起こさせる教育、② バランスのとれたカリキュラム、③ 献身的で有能な教員など12の特徴を挙げている。

最近の例では、経済協力開発機構(OECD)から2009年のPISA調査を基に作成された報告書(注)がある。その中では「持続的な優秀さの物語」と題する1章を設けて、日本の教育を取り上げている。

報告書では「国際的な教育の比較調査が始まって以来、日本は、国際的順位のトップか、その近くに居続けている」と指摘した上で、持続的な卓越性を維持する日本の教育システムの特徴として、次の諸点を挙げている。

(1) 標準化された要求の厳しい教育課程基準：日本のカリキュラムは、注意深く綿密に開発されている。数学と理科では、全体を通じて基礎的・基本的概念が強調されており、他の国に比べて要求水準が高い。日本の教科書は、国の教育課程基準に忠実で、その内容は無駄がなくコンパクトであり、教科の基礎にある中心概念を重視している。

(2) 生徒のやる気を重視する教授方法：日本の学級は、規模が大きいけれど、優秀な生徒のための特別クラスもなければ、飛び級や留年もない。教員は、問題のある生徒について連絡しあい、個人的な注意を払い、できない生徒には放課後に居残り授業もす

る。教員は生徒にやる気を起こさせるために授業計画を考え、授業の展開を工夫している。

(3) 学校と家庭のコミュニケーション：日本の学校では、学級担任が全ての科目を教え、一般的に数年間同じクラスを受け持つ。学級担任は定期的に家庭を訪問し、学校と家庭の間を往復するノートを用いてコミュニケーションを図っている。

(4) 長い授業時間と補習教育：日本の生徒が成績を上げる主な要因は、長い授業時間にある。夏休みは世界のどの国よりも短く、その間も自由研究をさせている。そのうえ日本の生徒の大多数は、学校の授業以外に民間の塾で勉強をしている。

日本は一級の教員を手に入れている

(5) 教員の質：日本の教育の質を説明する最も重要な手がかりは教員の質である。近代学校制度が始まったとき、教員のほとんどは武士階級出身で、教員は名誉ある職とされてきた。教員は尊敬され、給与も公務員の中で高く位置付けられている。日本では初任者に1年間の研修プログラムが提供され、教員研修では「授業研究」が重視される。日本の教育の成功は、第一級の教師を手に入れていることにある。

こうした外国から見た日本の教育に対する高い評価と日本のメディアが報じる低い評価のギャップはなぜ生じるのか。我々には日本の教育が身近すぎて、欠点ばかりが見えるということだろうか。

もう一つ、報告書は、日本は絶えず教育システムの国際比較に取り組み、明治時代から今日まで常に最高の成績を上げた国から最良のものを日本の状況に当てはめる決断をしてきたことを成功要因として挙げている。いや、OECDは日本の教育事情をよく調べていますね。

(注) *Strong Performers and Successful Reformers in Education* (2011)。日本語版『PISAから見る、できる国・がんばる国』(明石書店)

(ひしむら・ゆきひこ=(財)学習ソフトウェア情報研究所 理事)

●最新刊！ 「気付き力」「段取り力」「根回し力」「見通し力」の4視点からわかりやすく解説！

教務主任の仕事術—ミドルリーダー実践マニュアル

【編集】山崎 保寿(静岡大学教授)

A5判 200頁／定価2100円

■研修誌・図書の小社への直接のお申込みは、無料FAX 0120-462-488 をご利用ください(24時間受付・即日発送)